論文の内容の要旨

論文題目　　日本占領期上海文壇再考

―中華日報社と中国文化人―

氏　　名　　山　口　早　苗

本研究は、日本の占領地政権であった汪精衛政権／南京国民政府の機関紙『中華日報』を材料とし、中華日報社に集い、これまで「対日協力者」「漢奸」として否定的評価を受けてきた中国文化人の文学活動・思想の再検討を通じて、占領地上海の文壇状況を実証的に捉え直すものである。これまで、当該時期の文壇については、文藝雑誌の分析から、左翼文学者や大衆文学者などの各文学グループの動向を明らかにする研究が主流であった。これに対して、本研究では当該時期の新聞である『中華日報』を利用することで、汪政権に近い位置にいた文化人たちの活動の一端を明らかにする。これにより、占領期上海文壇の全体状況を立体的に描き出そうとすることが、本研究の主な目的である。

日本占領下の上海文壇に関する研究は、特に近年になり、豊富な蓄積が見られる。こうした研究から、上海文壇の内容が徐々に明らかになっているのは間違いない。しかし、それらの研究によって上海文壇の全体像は明らかになったと言えず、これに対して筆者は次の点でさらなる検討が必要だと考える。

まず指摘すべきは、文壇状況を考察する際に、文藝雑誌と一部の総合誌以外の媒体への検討がなされていない点である。この傾向は特に中国大陸の研究で顕著である。もちろん、筆者も、文藝雑誌は当該時期の文学者の活動を追う上で重要な資料であると考える。しかし、こうした文藝雑誌のみの分析から、当該時期の文壇状況を十分に描くことは可能だろうか。例えば、日本占領期の文壇状況を振り返るうえでよく指摘されるのは、通俗文学の興隆である。上海市民は占領による閉塞感や焦燥感を探偵小説や恋愛小説といった通俗的な読み物

で紛らわせていた。このことは、当時最も読まれた文藝雑誌が『万象』という大衆誌であったことからも明らかである。

だが、当時の上海の人々はこうした文藝雑誌のみを読んでいたわけではない。当時の証言にもあるように、文藝雑誌と同様に新聞に掲載された文学作品も多くの上海市民に歓迎されていたのである。多くの市民にとって、新聞は雑誌以上に身近で手に取りやすい媒体であったろう。戦時下の上海文壇には、紙の供給問題があったにせよ、相対的な「安定」と「繁栄」の中で多様な発表媒体が存在したことは疑いない。それにもかかわらず、従来の研究では文藝雑誌以外の媒体が考察の対象となることはほぼ皆無であった。その背景には、当時の上海で刊行された新聞が日本軍部或いは日本の占領地政権である汪精衛政権と密接な関係にあり、後にはこうした政治的背景から言及が避けられてきた、という事情がある。

ここで、筆者が注目したいのは、占領下の上海で発行された新聞紙上で多様な文学活動が展開されていた点である。当時上海の大型新聞には、文藝欄を含む多様な副刊が掲載されており、新聞文藝欄に集った作家たちはときには通俗文学作家と論争を行うこともあった。こうした状況は文藝雑誌のみの分析では、おそらくほとんど見えてこない。つまり、当時の上海文壇の複雑な動向を考察するためには、新聞文藝欄などの他の媒体への目配りは必須なのである。

こうした研究状況をふまえて、本研究では汪精衛政権の機関紙であった『中華日報』を取り上げ、新聞文藝欄に集った文化人たちの創作活動や思想営為を明らかにする。付録の記事目目録が示すように、筆者の調査によれば、同紙の文藝欄には当時の上海で知名度の高い作家が多く参加しており、彼らは積極的に文藝欄に寄稿した。彼らの活動が上海文壇の一角を形作っていたのは間違いあるまい。さらに言えば、占領地の状況を把握する上で、汪政権の機関紙である『中華日報』の存在を無視することはできないことは明らかである。中華日報社に参加し、汪政権に近い距離にいた文化人たちは、当時どのような編集方針で文藝欄の紙面を構成し、また作家たちはどのような考えで文筆活動を行っていたのか。本研究は『中華日報』という媒体を手がかりに、占領下の上海文壇を担った文化人達によるさまざまな文藝活動を検討することで、当時の文壇状況をより立体的・総合的に把握することを目指す。

本研究が行う考察は具体的には以下の二つである。第一に、『中華日報』文藝欄を代表する「華風」(1939～1942 年)、「中華副刊」(1942～1945 年) という 2 種の刊行物を取り上げ、その特徴を明らかにする。第二に、中華日報社に集った文学者のうち、中心的な働きを行った陶亢徳、楊之華という 2 人の編集者を取り上げ、戦時下におけるその活動を追うとともに、彼らの文学観や思想を明らかにする。

『中華日報』は中国国民党汪精衛派の機関紙として、1932 年 4 月上海で創刊された新聞である。1937 年に日中戦争が勃発すると、同年 11 月に一度停刊したが、1938 年末に汪精衛が重慶を脱出して対日協力方針のもとで「和平運動」を推進したことにともない、1939 年 7 月に汪精衛南京国民政府の機関紙として、上海で復活した。復刊後、同紙は日本の敗戦直後の 1945 年 8 月 21 日まで刊行された。

中華日報社は、社長を汪政権の宣伝部長を担当した林柏生が、代理社長を許力求が、副社長を顔加保・趙慕儒が務めた新聞社である。彼らはいずれも広東省出身で、林柏生の卒業した嶺南大学と密接な関連を持つ人物で、汪政権宣伝部に所属した面々であった。こうした人脈から中華日報社は「広東会館」と称されたという。必ずしも汪政権に限ったことではないが、宣伝部を含む党・政府組織や新聞社などのメディア機関に地縁・血縁の結びつきが強く作用していたことは重要である。中華日報社編集部には総主筆・総編集・副総編集のもとに、社論委員会・主筆・資料室主任・編集主任・政治主任・経済主任・国際主任・副刊主任・通訊主任の 9 つの役職が置かれた。本論文で取り上げる 2 名のうち、陶亢徳は主筆を、楊之華は副刊主任を担当した。

本研究は序章、本章、終章及び図表・参考文献・付録によって構成される。本章は全 4 章から成り、前後で内容が分かれ、前半の第一・二章は『中華日報』文藝欄「華風」「中華副刊」の内容分析、後半の第三・四章は陶亢徳・楊之華の二人を取り上げ思想的・文学的傾向を分析するものである。

第一章「政治宣伝と娯楽のはざまで――『中華日報』文藝欄「華風」の考察」では、『中華日報』初期の文藝欄「華風」の論調や編集方針の変化から、特に「孤島期」（1937 年 11 月～1941 年 12 月）に中華日報社に集った文化人の政治活動や執筆活動を考察するものである。「華風」はもともと専門的に文学作品を掲載する文藝欄として企図されたものではなく、広く文化一般を扱う紙面であった。そのため、当初は時局論・社会問題などを掲載したが、次第に純文学・演劇・映画に関する話題を提供するようになるなど、掲載内容は目まぐるしく変化した。本章では、この変化の背景で華風編集部が読者の求める通俗的な藝能ニュースと「和平」を中心とした政治宣伝という両者のバランスに腐心しており、宣伝と娯楽の緊張関係の中で文藝欄が推移していく様子を明らかにした。

第二章「「中華副刊」に見る占領下の文学活動」では、「太平洋戦争期」（1942 年 1 月～1945 年 8 月）の『中華日報』文藝欄である「中華副刊」に注目にする。本章では、「中華副刊」の性格とその文学的傾向を七つの特徴から考察した。これにより、「中華副刊」が鴛鴦胡蝶派と呼ばれた大衆文学作家や商業文藝誌『雑誌』に集った文化人とは対立関係にあったこと、「中華副刊」は従来考えられてきたような「和平文学」を提唱する刊行物ではなく、政治的言説が紙面を飾ることはまれであったという新たな事実を明らかにした。

第三章「陶亢徳と中華日報社――編集者の側面に注目して」では、中華日報社に関係した陶亢徳（1908～1983）を取り上げる。陶亢徳は 1930 年代の上海で雑誌『論語』『風雨談』などの編集者として名声を博した人物で、1942 年以降も上海に残り汪政権の機関紙／誌に関わった。このため戦後長らく汪政権の方針に共鳴した文化人（「親汪文人」）、「漢奸」と見なされてきた。陶は中華日報社への就職に際して、自ら加入条件を提示することで、政治的な言説から一定の距離を取る姿勢を示した。本章では、実際に陶亢徳が手掛けた雑誌『中華週報』を考察対象とすることで、彼が直接的な「抗日」「抗戦」の主張、或いは「沈黙」「忍従」とは異なる一種の「抵抗」を模索していたことを明らかにした。

第四章「日本占領下における楊之華の文学活動——上海文壇批判とその文学観」では、陶亢徳と同様、中華日報社に関わり「中華副刊」の編集者であった楊之華（1913～？）の思想を論じる。楊之華は先行研究ではほとんど言及されることがないが、戦時下の上海文壇で活躍した人物の一人である。本章では、当時の上海文壇で突出した存在であった楊之華の足跡を追い、その活動を戦時期の中国文学史の中に位置づけることを目指した。本章では、彼の文壇への使命感ともいうべき自覚的な活動から、彼自身が国家や民族をいかに捉えていたのか、という思想の問題に着目し、彼の戦時の言論活動を多面的に検討した。

終章では本章の内容を振り返るとともに、全体を総括していくつかの結論を提示し、さらに今後に遺された課題について言及する。